

— 第百貳拾七号 —

(2014年春号)

橋口博之作陶展

今回で連続12回目の作陶展を迎えます。

しん窯の大敬(ひろのり)君が、陶交会のメンバーと九州陶磁文化館に常設してある柴田夫妻コレクションに学び、大橋学芸員さん監修のもと、手塩皿の型変わりを復刻しました。陶交会のメンバーの窯は、東京ドームのテーブルウェア・フェスティバル2014～暮らしを彩る器展～で一足早く披露し、大反響を呼んだそうです。しん窯下絵付伝統工芸士橋口博之専務も独自のデザインを文様に生かして、三越日本橋本店で発表します。

毎年新作に挑まなければならない、本人はプレッシャーで悩んでいるようですが、お客様も私達も新作に毎年興奮しながらワクワクドキドキしています。毎年の事ながら、無から有を生み出す苦勞と共に、新作に出会う期待と喜びも共有しています。私達も応援に行かなくてはと思っています。

このたび、伊万里・有田焼手塩皿 Collection 創出プロジェクトより、「おてしょ皿」ー古伊万里のちいさなちいさな小皿ーが工業組合より発刊されました。1冊1,800円(税抜)です。お問い合わせはしん窯まで。

平成26年3月12日(水)より
3月18日(火)まで
日本橋三越本店 本館5階特選和食器
(会期中、橋口連日来場)



雪の汁（つゆ）

NHK福岡「きんすた」で、1月24日（金）に有田名物大根料理が紹介されました。その名も「雪の汁（つゆ）」という美しい名前です。竹で作ったおろしばたという道具が有田の旧家では残っていて、特に窯元では徹夜の窯焚きが多かったので、ふるまい料理としてそのおろしばたを使って作られていたそうです。

1月6日（月）しん窯の車おろし（仕事始め）の日に取材に入られ、新しい年のはじめの窯やき行事のひとつとして記録されているようでした。大根料理との関係があまり良く分からないまま、いつものように取材ウェルカムだったのですが、TV番組を見て納得できました。TV界の人達は、様々な切り口からテーマを浮き彫りにされるのだからと感心する事しきりでした。しん窯ミニ登り窯のロケもあって、職人さん達もびっくりされるやら喜んで下さるやらでした。今年も春から縁起が良い！と独りうなずいていました。

テレビ放映されました

「はじめてのおつかい」日テレ系 1月13日（月）

「きんすた」NHK福岡 1月24日（金）

にいずれもしん窯が大きく取り上げられました。特に前者の「はじめてのおつかい」は全国放送で人気番組らしく、大反響でした。身内からは「何故教えてくれなかったの。」などとブーイングでしたが、過去においてテレビの取材は長時間受けるもののカットされたりして期待を裏切る事が多く、最近はずっと取材は増えてきましたが、予告する事も少なくなりました。しかしTVやメディアの反響は大きく、世界の有田を発信して来る2年後の400年祭へ繋げ、その後ますます「世界の有田」へ向かって邁進する町民の覚悟が必要です。

タンクとの思い出（前号に続く）

⑧登り窯築窯

一方、窯の原点である穴窯や登り窯を築いてお互いにわか陶芸家をきどっている。何事も原点に帰る時に、現代の窯の仕組みや方法を熟知する事ができるし、先人の偉業や職人技にひれ伏し、心から尊敬の念が生まれる。そして継承した意味や次へ繋ぐ意義などを理解できる。

1996年（平成8年）青花誕生20周年記念事業として、黒牟田新窯古窯跡のとなりに1㎡2部屋の連房式ミニ登り窯を築いた。すでに77回も焚いている。ガス窯は自動制御なので、点検をマメにしたり要領を覚えると殆んど手がかからない。いつでも安定供給してくれるし文明の利器に感謝をしている。しかしやはり昔の窯たきさんや職人さんの気持ちを知らたいし、味わってみたい衝動にかられる。そしてにわか陶芸家にひたる時もある。ぜいたくな登り窯窯たきなのだ。窯にも陶芸教室の生徒さんの作品や体験工房のお客様の作品や私たちの遊びの作品などを入れて楽しんでいる。

最近では、初期有田の技法や作品にこだわって再現したいという有田人も現れ、快く開放している。今では、町内で薪を燃料にして窯焚きをする窯も少なくなった。去年の秋の陶磁器まつりでは、しん窯も含めて5窯の薪窯饗宴がイベントとして開かれた。一同に松煙に触れる光景は初めての試みである。

⑨三度の大事故

41年間LNGと対峙する中で、忘れられない事故にも遭遇している。

一度目は、ガス式ペーパーライザーを再点火している最中に爆風にあった。私ではなく、業者のプロだった。

二度目は、ガス窯を焚いている時で、風のせい炎が消えたのであわてて職人さんが再点火した。そして約5m位吹き飛ばされた。これも爆風だ。ガスの性質を熟知していれば事故は避けられるのだが、とっさの時、あわてて点火する事ばかりに気を取られて、炎を消しては窯が出来不出来になると思い込んで一時も早く再点火しようと周りの状況が一瞬見えなくなってしまう。ガスは空気よりも重いので、ガス漏れがすると匂いでわかるが、どの位の量が床にまとわりついているかあまり分からない。そこに落とし穴があって、周辺にあふれているガスに引火して人が吹っ飛んでしまう威力がある。

三度目は、私自身の体験だ。凍りつくような朝を迎え、気化した管が冷えてブタンガスが再液化してLNGに戻る。ドレン抜きからその液を放出していたら、すぐ近くの石油ストーブに引火してドンという爆音と共にコンクリートがはがれて私も数10cmその場で飛び上がった。液化したLNGは、気化すると約273倍に増えてガス化する。室内は暖かくしていたし石油ストーブの近くだったので、わずかに数滴のLNGだったがいきなりガス化して引火して爆発したのである。私は肝を冷やした。そしてブタンガスとLNGの相違やガスの威力に驚かされ、その怖さを実体験した。三度とも人身事故には至らなかったけれども、今でも三度の場面に直面しているのでゾッとする。

ガスとは関係ないが、シャトル窯に変わり移動式台車を取り扱う中で魔がさしたのであろう、脱線事故が起こり、4m³台車がひっくり返った。今まさに窯に入れて焚き始めようとする最終段階のやきものが全滅した。最も辛い事だが2度も体験した。

最近では平成24年11月16日の事である。信じられないタンク事故でガスラインがストップした。まさに攻め寸前の出来事だったので、決断まで数時間を要した。窯の温度が900℃まで上がっていたが、火を止めた。苦渋の決断だった。後日再び窯入れしたが、歩どまりは約70%だった。不幸中の幸いと言える。ここでついに10トンタンクの交代時期があると認めざるをえなかった。2013年(平成25年)12月に外され解体されると思うと、何とも言葉にならない。10トンタンクは私の窯焼き人生とほぼ同じで喜怒哀楽を共に体験してきたからである。同時に同志であるという思いが募ってくるから不思議である。無機質な金属であるが、窯の燃料であるLNGと共に歩いた約40年の歴史は、物と人との関係を超越して何か通じ合う情が存在してくる。いよいよタンクも世代交代である。私も古希を迎えたので、しっかりお祓いを受けて爽やかにバトンタッチをしたいと願う今日この頃である。

ほんとうに10トンタンクさんお疲れさまでした。そしてありがとうございました。

⑩おわりに

丸40年間LNG10トンタンクとともに窯やき道を歩んできたが、時系列で綴る事ができず、ハプニングやサプライズなど印象的な思い出をおもむくままに書いた。昭和42年4月1日からしん窯に入社した時から瞬く間に燃料革命がおこり、薪、石炭、重油、灯油と変わり、昭和47年4月3日に結婚式をあげた頃、また陶都有田青年会議所設立の頃からLNGと付き合ってきた。もちろん窯のスタイルも変わり、窯のいろはを全て勉強する事もできた。半世紀に近い窯やき人生の中で、約40年間10トンタンクと共にしん窯の歴史の1ページを作ってきた。ほんとうに感無量である。未来永劫奥の深い窯やき道は続くが、2013年（平成25年）夏の有田工甲子園初出場初戦突破、2年後の日本磁器誕生・有田焼創業400年、そして6年後の東京オリンピックをホップ・ステップ・ジャンプととらえ、常に前を向いて進んでいきたい。そして8年後、金婚式を健康で笑顔で迎えられるばこんなに充実した窯やき道もないと言える。まだまだ生涯現役をめざして頑張る覚悟である。10トンタンクと新しい1トンタンク設置ができて、感懐もひとしおである。ありがとうございました。 —おわり—

三代目タマを偲んで…

2014年（平成26年）2月12日は、生涯忘れ得ぬ日になりました。雌猫の三代目タマが亡くなりました。私は初めてペットロス症候群になりました。女房は申すまでもありません。

思えば、一昨年11月16日、窯の調子が悪く呆然としていた時に会ったのが、生まれて間もない三毛猫でした。栄養失調状態で歩く事もおぼつかないような状態でしたが、私達にすり寄ってきてすっかり好きになってしまいました。即三代目タマちゃんと命名して、家族の一員になりました。

最初が肝心だとしっかり躰けたら、台所の洗い場にのぼらないし、夜10時頃になったら必ず自分の寝床に戻って寝ていました。「おりこうさんネ。」を連発すると、甲高いソプラノ歌手のような声で応えていました。私達の様々なストレスも、タマによって数えきれない程消え救われた事か。最近では工房の職人さん達にもかわいがられ、しん窯の看板娘のようになっていました。

日毎に元気で健康になって、工房内外を自由に動き回るほどでした。ついに道路を出るようになって、2.12の朝、帰らぬ猫になってしまいました。道路に出てはいけませんよという躰までは出来ず、絶句するような別れになってしまいました。あまりにかわいがり過ぎたのでしょうか、否、家族の一員として普通に接していたのですが、思わず頭を撫で抱っこしたくなるような不思議な猫でした。わずか1年3ヶ月の短い付き合いでしたが、愛情たっぷり濃密な間柄でした。私も女房もなぜ！ どうして！ をくり返すばかりで、涙があふれてたまりません。加齢のせいもあるのかなあと思いながらも、寂しさや悲しさや辛さをどこにどのようにつけて良いのか分からず、ただ日一日と時間が経っていきます。動物大好きな私達は、縁あってここ30年間で2匹の犬と4匹の猫に出会い家族として飼っていましたが、それぞれに楽しい思い出をいただき癒され、ついに別れてしまいました。言葉にならない今日この頃です。